



## report 01 平成16年7月13日新潟豪雨災害から 今後の治水のあり方を考える

新潟大学工学部教授 大熊 孝

### 新潟水害の特徴

今回の新潟水害の特徴は、信濃川支川の五十嵐川と刈谷田川で計画規模を超える洪水が発生し、堤防を越流するとともに、五十嵐川・諏訪地点および刈谷田川・中之島地点で破堤し、激流となって人家を襲い、多数の水死者と家屋の全・半壊という激甚な被害を発生させたことにある(表1)。

#### 表1・破堤地点での被害概要

五十嵐川・諏訪地点破堤での被害  
水死者9人、全壊家屋1棟、半壊家屋55棟  
刈谷田川・中之島地点破堤での被害  
水死者3人、全壊家屋15棟、半壊家屋37棟

12人の水死者のうち10人が60歳以上であり、急激な氾濫に逃げる時間的余裕がなかったことが水死の主原因である。また、全壊家屋は復旧に困難を極めているが、半壊家屋も一階の天井近くまで浸水し、4ヵ月経った時点でも住むことのできない家が多く、解体新築を余儀なくされる家も少なくない。その解体費用は3.3m<sup>2</sup>あたり35万円かかる。県・市による被災者生活再建補助金制度では制限なしで全壊100万円、半壊50万円の支給があるが、国の被災者生活再建支援制度(支給上限300万円)では基本的に世帯収入500万円以下が支給対象であり、多くの被災者は解体費もまかなえない状況にある。

なお、越流しただけで破堤しなかったところは大きな被害にはなっていないことを注目しておきたい。

### ダム群の水害軽減効果

五十嵐川には笠堀ダムと大谷ダム、刈谷田川には刈谷田川ダムがあるが、多くの被災者から「ダムがあるのにどうして水害になったのか?」、特に五十嵐川では「2つもダムがあり、もう洪水は起こらないものと安心していただけなのに・・・。」と疑問が多く寄せられた。ダムへの流入量と放流量の関係をみると、ダムは下流の被害を軽減したといえる。しかし、こうした疑問はダムの機

能を過大評価していた裏返しであり、ダムの威容やダム建設時の説明などに過大評価を招く要因があったものと考えられる。

ダムの洪水調節機能を計画降雨の全流出量(流出率0.85で計算)に対する貯留量である洪水貯留率で見ると、五十嵐川で23%、刈谷田川で4.4%である。今回の豪雨は計画雨量より大きいので、今回のそれはそれぞれ20%、4%以下になる。要は、計画を大規模を超える洪水の場合、ダムによって水害が軽減されたかもしれないが、防ぎきれなかったということであり、その限界は認識しておくべきである。なお、これらのダムの100年間の計画堆砂量に対する堆砂率を見ると、7・13洪水後で笠堀ダム92%(完成後40年)、大谷ダム34%(同11年)、刈谷田ダム107%(同24年)であり、いずれ土砂で満杯になることを考えると、長期的にはダム依存の治水から脱却すべきである。

### 今後の治水のあり方

今回の洪水は計画規模を越えるもので防ぎきれなかったことは明らかであり、水害裁判的な責任が問われるものではないと考える。しかし、水死者を出し、復旧の困難な壊滅的被害を集中させたことは、今までの治水のあり方に反省が求められる。特に、近年のように計画規模を超える豪雨が頻発している状況下では、計画を超える超過洪水に対して、被害の集中を避け、分散・軽減させる方策を立てる責任があると考えられる。

その方策の1つは、越流だけなら被害は小さいのであるから、超過洪水の堤防越流は致し方ないとしても破堤を起こさせないことにあると考える。堤防は確かに土でできていて越流すれば破堤を覚悟すべきであるが、今回の洪水でも明らかなように越流した箇所は多いのであるが、そのほとんどは破堤しておらず、それなりに強いということもできる。今回の破堤箇所は漏水実績や護岸脆弱で水防計画上危険度Aランクに

## ■水辺レポート

## 平成 16 年 7 月 13 日新潟豪雨災害 から今後の治水のあり方を考える

評価されており、弱点があったから破堤したともいえるのである。こうした弱点を潰しておくことが喫緊の課題であると考え。

### 水防活動について

この堤防強化は短日時に達成できるものではなく、こうした被害を軽減するためには、やはり水防活動が重要である。昭和 53 年 6 月には越後平野全域にわたる水害があったが、その際には見事な水防活動が展開していた。しかし今回は、消防団が活躍したのは事実だが、上記の両破堤地点ではほとんど水防活動が行われていなかったし、水防倉庫の鍵がかかっていたり、資材が手付かずで残っていたり、と水防能力の低下は覆い隠しがたい状況にあった。また、床上浸水後に残される泥に対しても、昭和 53 年当時は多くの家で水の引き際に箒で水を掻き混ぜ泥を排除していたのだが、今回はこのような活動をする家がほとんど見られず、被害を激化させていた。家が壊されない場合には「在宅避難」も再検討すべきでないかと考える。

災害というのは、文明の世界から原始の世界に瞬間的に放り出されることである。避難勧告や指示には限界があり、最後は個人の生きる能力に頼らざるを得ないことを肝に銘ずるべきである（高齢者と幼児はそうした能力がないので特別な介助が必要であることは言を待たない）。そのために「水防五訓」や下記の「個人水防心得五訓」を参考にして欲しい。

### 個人水防心得五訓

1. 調べておこう、自宅のまわりの氾濫実績。
1. 大雨きたら、まずあかりと水と食料の準備。
1. ハイテクの自動車浸水に弱し、車での避難、要注意。
1. 濁水のしたの凹凸みえず、片手にころばぬ先の杖。
1. 氾濫の引き際に、泥・ゴミ掃除忘れずに、後始末大変。

(1992.5.29 大熊作成)

## report 10.23 中越地震遭遇メモ

地震へのご心配、震災見舞い金有難うございました。後日、その報告をいたします。10月23日の夜6時に震源地周辺で遭遇した地震体験をレポートします。

23日、大熊代表他世話人の進、戸枝、安田、相楽の計5名で坂本会員の開催する大池川再生シンポに参加するため小出町に向かった。シンポの前に入った近くの薬師温泉の玄関先に出た5時55分頃に地震。ズンッ、グラググラッ、グラグラと凄まじい大地の揺れ、ブレが2、3度続いた。建物がまるで大きな悪魔がオモチャをもてあそぶかのようにガシャガシャと大きく左右にブレ、近くでガラスがガシャーンッ。次の瞬間、まわり全てが一斉に停電、闇になった。「生まれて初めてだ」「東京から来て7年で初めてだ」「新潟地震から40年振りの地震」「大阪のホテルでこの規模の地震にあったよ」など平然と会話を交わしたが、皆は内心かなり興奮し動揺していたはずだと思う。

みんなが一斉に携帯をかけたが不通。車のTVで小千谷市が震源で震度6+、小出5+だったと聞き、「さっきの揺れが震度5+か」と。その後もこれが余震かと思えるほど車がユッサ、ユッサと大きく揺れた。車3台が土砂崩れで埋まった、高速道も閉鎖、新幹線が脱線とニュースが流れ、皆で「こりゃあ、大変なことになった」と実感。翌朝の飯にとコンビニで買ったばかりのおにぎりや豚汁など最小限の夕飯が確保できたのが救いだった。

シンポは中止となり新潟に帰ることにした。最初は県道に入ったがダメ。R17も落盤でダメ。結局R252の福島県会津只見町回りの峠越えで新潟には深夜1時半頃に戻った。道中どこでも、家の倒壊が怖いのか子どもも老人もみんな表に出て道路脇で毛布に包まって座っている。「まるで難民だなあ」。暗く、寒く、余震が続き、不安な様子。被災者はこれからが大変だ。ケガも無く戻れたことを幸いと思いたい。車中『水害対応の大熊哲学』を聞きながら今年の新潟は水害もあり、地震もありで改めて「災害対応哲学」の必要性を感じた1日だった。

2004.10.24 相楽治



## report 03 新潟県中越地震現地炊出し報告

10月23日17時56分に発生した中越地震で朝日山酒造が壊滅的な被害情報を見ながらお世話になった「(財)こしじ水と緑の会」に私達が出来ることとして豚汁の炊き出しを申し出た。



「水と緑の会」からの連絡を受けた越路町役場からガスが止り熱い食事が出来ない、ありがたい申し出に感謝する、健康管理センターに800食、商工会館に200食をお願いしたいと連絡がきた。

28日、早速、食材問屋に食材・食器・箸の格安提供を申し入れたところ16万相当を4分の一で提供。プロパンガスは被災地に提供され余分がないので新品10kボンベ2本を購入。東地区公民館から話しを聞いた利用者28人が調理室に集り調理中、浅井敬一さんが警察、市役所を回り緊急通行証明を発行してもらい午後3時に浅井・大橋班は商工会館。山田(淑)山田・沢口・星島班は健康管理センターに分かれ車2台で出発。5時半に目的地に到着、7時夕食開始予定。センター前駐車場は避難車で埋まっていたが私達のために一角が確保され6時半には準備OK、寒さが加わり待ちかねた人が並び始め一人々がありがとうと礼を言われながらアツアツの豚汁を配る、気が付いたら8時を回っていた。帰り際に水・牛乳・おにぎりを頂き感謝の言葉に送られ心が和んだ。  
注、私達の申し合わせ。1会場責任者の指示に従う・2豚汁は余分に持って行く・3被災者の写真は撮らない。

通船川・栗ノ木和川ルネッサンス  
星島 卓美

## report 04 第2回やろってば!!「水と緑」ワイワイガヤガヤ寄ったかりが開催されました。

にいがたの川や潟、水田などの水辺や、海岸や里山や街なかの緑を、守り・育み・使い・管理している活動団体のアピールの場として、第2回やろってば!!「水と緑」ワイワイガヤガヤ寄ったかりが8月29日に新潟市長潟の県土連ビル開催されました。

今年16団体の参加があり、活動内容と発表パフォーマンスについて、選考員6名の他に来場者全員が投票し、公開選考により賞を決めました。水緑賞は早出川清流スクールの「五泉トゲソを守る会」、寄ったかり賞は花絵ゲリラ作戦の「にいがた花絵プロジェクト実行委員会」、ワイワイガヤガヤ賞はレッツゴー環境探検隊の「女池小学校」、やろってば賞は西川環境活動の「中野小屋中学校」、と新津市・市有林再生事業の「NPO法人にいがた森林の仲間の会」でした。



その他の参加団体は「NPO法人新潟水辺の会」「新潟県学校ビオトープ連絡協議会」「NPO法人加治川ネット21」「牡丹山小学校」「大形小学校」「通船川・栗ノ木川ルネッサンス」「にいつエコサポーターズ」「山林ボラン広場」「北陸粗朶業振興組合」「大形地域環境再生委員会」「鳥屋野潟21世紀の会」でした。来年は皆さんの参加を期待しています。

森本 利

## ■水辺レポート

## 信濃川フェスティバル Eボート大会

今年も、毎年恒例となっている信濃川フェスティバルでのEボート大会が8月22日(日)に開催された。今年では従来の組み立て式のEボートから、白根の高橋氏の作成によるNETボート(木製10人乗りカヌー)でのレースとなった。NETボートは新潟Eボート高橋?の略(相楽事務局長命名)で高橋氏が技術と経験を駆使して作成した大形木製カヌーで、従来のものに比べ、安定感・スピード・操縦性などが大幅に改善され、これまでに比べ、漕ぎ手の技術と呼吸が重要となった。そのため、レース参加14団体のうち、1位、2位を経験豊富な信濃川ファンクラブのチームがとり、学生チームなどの腕力のある若いチームが予選落ちするなどの結果となった。また、一般乗船体験も例年以上に盛況で、希望者が途絶えることがなく、一日で238人の乗船があった。



NETボートは安定感がよく、小回りが効き、漕艇が簡単で、必要であれば船外機も設置できる設計となっていることから、災害時の救護艇としての能力も、ゴムボートなどより高いとみこまれる。今後は、NETボートの自治体などへの販売も視野に入れ、新潟発で新しい、Eボートへの取り組みが期待される。

事務局 寺村 淳

## つうくり市民会議 幹事会への提案

地震へのご心配、震災見舞い金有難うございました9月11日に1年振りに開催された「つうくり市民会議」は行政の方々が対面式でなく壇上に向かってこれからの会議のあり方を示唆するものであった。結論として、市民会議そのものの活性化を図るために幹事会を設け、本格的な官民パートナーシップ型の川づくり、川使いを実現しようというものであった、と思う。

11月4日には、自治会、NPO、企業、県のメンバーでの幹事会が開かれた。お互いの認識のズレを再確認しながらこれからの議論を進めることが確認された。そこで私はこれまでの課題として、1通船川再生に関する事業の連携・統合、2各事業の主催、共催での一体化が望ましいこと、そのためには■新たな事業の創出と資金獲得が必要であることを提案した。具体的には、I官民パートナーシップの共通認識基盤づくり事業として、1新担当向けの『川づくり方針』学習会、2住民の楽しみつき川の学習会、II川再生の年次目標とそのプログラム化として、3水質改善目標、2川の再生プラン作成、3親水水道・舟道・広場橋の実現プログラム、4川辺の庭、畑の「住民農園」化の実現プログラム、5憩いの川辺・庭・公園・公共広場・商店の実現プログラム、6生き物にやさしい川の実現プログラム、III川再生パートナーシップ事業の実施として、7緑陰植栽・水草植栽、8草刈り、9水辺クリーン、10管理や情報の基盤事業、11川祭・花筏祭、花舟祭、川盆踊りなど、IVつうくり事業団体の育成として、12NPOつうくり:ソフト事業や植栽事業の受け皿づくり、13NPCつうくり:拠点の整備事業、PR事業、教育船運営の受け皿づくり、Vつうくり川守グループの育成として、14各自治会、各町内会、各企業、各商店会、各学校、各公共施設での組織化、15川沿いの市民以外での応援団の組織化:花筏祭の応援など。これらの15個のプロジェクトを担当できる体制づくりが急務だ。

幹事世話人 相楽治

report 07  
佐潟ハス採り大会

恒例のハス採り大会は10月3日雨の中開催された。いつもならボランティアで気軽に天ぷら揚げを楽しむところだが、4月の異動で西地区公民館に勤務することになり、仕事として担当した。



当日は台風の到来のため、朝から開催するかどうかの問い合わせの電話が多数寄せられたが、まず現地に直行し、テントを張り、さあ準備。

幼児、小学生の家族連れ、カメラのグループ、大学生などの参加者は、赤塚漁業組合の高橋さんに蓮掘りの方法やコツなどの説明を聞き、佐潟に入る。泥に足をとられ悪戦苦闘しながらハス採りを楽しんだ。

ハス料理は、水辺の料理人星島さんがつくるハス団子汁、味噌あじのハスの天ぷら、佐潟周辺で摘んだ野草の天ぷらを食べ、魚取りのマナー講習、投網体験をした。

さて、このハス採り大会は今年で8回を数える。ラムサール条約してい佐潟の恵みをずっといただけますように

大崎 信子

report 08  
両郡橋・新潟電鉄  
中ノ口川シンポジウム

10月10日(日)午後、中之口村農村環境改善センターホールで、中之口村村民の他新潟市、新津市、白根市から120名の参加者の「両郡橋・新潟電鉄・中ノ口川シンポジウム」(両郡橋と中ノ口川・新潟電鉄シンポジウム実行委員会主催)が行われました。

中ノ口川の舟運から新潟電鉄、自家用自動車と交通手段が移り変わる中で、明治23年から見守り続けてくれた西蒲原郡と中蒲原郡を結ぶ「両郡橋」。現在の三代目両郡橋も、建設された昭和9年から70年の風雪に耐えて現在架け替え中です。

両郡橋の架け替えを機会に、中ノ口川の今後のあり方を再認識するため、沿線の市町村の住民が膝を交え、将来的なテーマ・展望を共に考え、語りたい…そんな思いの中で開催されました



基調講演は、中之口村公民館長の北澤昭松氏より「中之口村50周年事業より見えた両郡橋」の講演がありました。その後大熊先生をコーディネーターに、伊東孝(日本大学理工学部教授)、白倉栄三(新潟県巻地域振興事務所長)、関谷俊昭(新潟県巻土木事務所長)、篠田昭(新潟市長)、渡辺正登(小吉水辺の会会員)、如澤寛(中之口村長)をパネリストに中ノ口川連携交流による地域おこしについてパネルディスカッションが行われました。

新潟水辺の会は、一昨年より巻地域振興事務所の業務委託を受けて、「中ノ口川夢の水辺、名所づくり」のワークショップを行い、昨年、川仲間の「川を楽しむ、小吉水辺の会」も生まれ、このシンポジウムでは会員の渡辺正登氏が熱い想いを語ってくれました。

加藤 功

■水辺レポート

## report 育て川ガキ！ 早出川清流スクール

新潟水辺の会と五泉トゲソを守る会との共催で8月8日に、五泉市早出川で、川ガキ育成塾を兼ねて「清流スクール」が開かれました。今回の活動は、阿賀野川連携ネットワークの協力もあり、家族を含めた子どもの川の体験を中心に、いろいろなメニューが用意されました。

猛暑の中、200名に近い親子とスタッフが集まり、午前中は全体で着衣泳の体験、続いて「ダンボール舟作り」「石焼きピザ作り」「投網・魚とり」の3コースに別かれ川遊びに挑戦しました。

清流スクールの目的は、「川は危ないところ、川は汚いところだから近づかないで!」ではなく、「川は危険なところもあるが、近づき方を学べばいろいろな体験ができ楽しいところ」を体感するために実施しています。また今回は、地域の財産である「川を見つめなおそう!」と、川原での珍しい写真展を実施しました。トン汁のサービスとおいしいお昼が終わったあとは、カヌー体験もありました。



子どもたちの充実した顔と悪戦苦闘した親の一日が、日焼けとともに残った清流スクールでした。

監事 中村吉則

## report 奥阿賀の秋を満喫 阿賀野川流域連携フォーラム

11月6日新潟県の阿賀野川最上流の集落である鹿瀬町豊実地区で、阿賀野川流域連携フォーラム開かれ、県内はもちろん福島県からも流域の宝物を活用しようとするグループや個人が参加した。

オープニングイベントとして、一週間後に開通する新潟県の阿賀野川最上流にかかる「新渡大橋」で橋の上の文化祭が行われた。秋晴れのもと開通間近な橋の上で地域の芸能などが披露され豊実のみなさんと新しい橋の誕生をお祝いした。



最初で最後の新渡大橋での記念写真

その後は会場を JR 磐越西線豊実駅周辺に移し、奥阿賀の食体験や特産品などの販売、奥阿賀音楽彩など、味わいや体験が盛りだくさんでのんびりとしたイベントが開催された。

日もかげり、流域連携フォーラムが始まりました。食体験を運営して頂いた「NPO にいがた奥阿賀ネットワーク」や、イベント全般の運営「とよみ若者わげしよの会」、福島県で昨年度立ち上がった「NPO 法人阿賀川流域ネットワーク」、この夏新潟・福島県の子どもたちと阿賀野川の水質調査を行った「溪流再生フォーラム」、豊実でアートを展開している「ふくろうの会」などが活動を発表し、交流を深めた。

来年は三川村の「谷花里づくり会」の皆さんが誘致に名乗りを上げ、今から楽しみだ。この次は2005年2月で新潟市内において、流域ネットワークの会議が開催される予定である。新潟県の3箇年にわたる阿賀野川流域連携事業の締めくくりとして今後の継続的な活動が生み出せると期待している。

杉山 泰彦

## チヨンゲチョン report 11 清溪川の過去・現在・未来

かつて近くて遠い国と言われた「韓国」

しかし、最近では「冬のソナタ」に代表される韓国ドラマが人気を呼び、何事につけても「韓流」がブームとなり、親しみのある国となっている。我が家のテレビでも毎日のように韓国ドラマが映し出されている。

清溪川はソウル市街地を西から東に横切る流域面積約 50km<sup>2</sup>、流路延長約 11km の河川であり、ソウル特別市が管理している。ソウルが約 600 年前に朝鮮王朝の首都となって以来、清溪川はその歴史と密接に関連し、洗濯場として、遊び場として、娯楽の場として、下水路として、庶民生活には必要不可欠な空間となっていた。しかし、大雨の度に氾濫する一方で普段は水不足により汚れていたため、昔から蓋を掛けることが議論となっていた。

日本植民地時代には覆蓋工事が始まり、朝鮮戦争後には本格的に始まり、高架道路も含めて 1976 年に完成した。暗渠化された道路と高架道路合わせて 1 日平均 16 万台以上の交通量があった。しかし、2002 年 4 月のソウル市長選挙で高架道路を撤去して清溪川を復元することを公約に掲げて当選した李明博氏は 2003 年 7 月には復元工事に着手した。清溪川復元事業の延長は 5.8km、事業費は 3,600 億ウォン、工期は 2005 年 9 月までの 2 年 3 ヶ月、進捗率は 2004 年 9 月末現在で 73% である。

韓国ではこれまで周辺住民の要望により多くの河川で覆蓋工事が行われ、道路として利用されてきた。清溪川復元事業はこうした自動車交通優先の社会からの転換と河川環境の復元という 2 つの面で、ソウル市ひいては韓国における環境型都市・社会への転換への試金石となる事業であると感じた。

また、清溪川復元事業の進め方のスピードも驚異的であった。関係者が多数に及ぶ 360 億円もの事業を市長選挙から 1 年 3 ヶ月で工事着工し、2 年 3 ヶ月の工期で竣工させる。日本では関係者の合意形成だけで 10 年以上は掛かるのではないか。例えば、日本橋川の上を通る首都

高速道路の移設も話題に昇っているが、実現しても 20 年後と言われる。



しかしながら、次のような問題について今後も注視したいと思う。

- ・新市長当選から 1 年余りで事業着手したため反対する時間もなく、未だに補償問題が完全には解決していない。
- ・事業当初は政策評価、住民意見の調査、広報に重要な役割を果たす予定であった「市民委員会」が、実際的には機能していない。

今回の視察は大熊会長を団長とする総勢 28 名であり、9 月 17 日から 19 日までの短期間であった。しかし、清溪川復元事業だけではなく、世界文化遺産とである「華城(水原市)」を流れる水原川(スウォンチョン)環境整備事業も視察した。また、環境保護と河川環境復元に関わる韓国の市民団体との交流により、その活動も知ることができた。

韓国における公共事業の進め方と河川環境に関する考えの一端を知ることができ、楽しくも有意義な 3 日間であった。

田辺 敏夫

## 中国第一水郷周荘へ行って参りました

10月22日(金)から25日(月)まで3泊4日で上海に参りましたが、24日の日曜日に中国第一水郷と言われる古鎮周荘を見学致しましたので、ご報告申し上げます。24日(日)は、水の都蘇州の観光が予定されていましたが、蘇州にもはや水の都の情緒を求めるのは難しいと聞かされていたので、周荘訪問を要望し、今回の周荘訪問が実現しました。蘇州から東南へ38kmとガイドブックに書いてありましたが、我々を乗せたバスは蘇州から約80kmを1時間半かけて走行し、午後3時半頃ようやく周荘へ到着しました。



堀と柳が美しい周荘の街並み

揚子江デルタ地帯は、自然の河川、湖沼に加えて縦横に水路が走り「南船北馬」という言葉が実感されます。上海の新しい空の玄関-浦東空港に着陸する機内からも、土砂や荷物を満載したバルジ船をたくさん見ることができました。舟運がまだ現役で頑張っているのです。上海の西、太湖と淀山湖に挟まれた一帯には、周荘の他、同里、朱家角など水郷の街が点在しています。中でも周荘は京杭運河(北京と杭州を結び中国大陸を南北に縦断するいわゆる大運河)沿いに位置し、東の海へと通じる水運の便にも恵まれていたことから物資の集散地として発展した街で、かつては舟に乗らなければ訪れることのできない所でしたが、15年位前に橋が架けられてからは訪れる観光客がどっと増え、今や水郷テーマパークのようになっています。実際に堀割が巡る旧市街に入るには、ひとり100元(1,300円)の入場料を取られます。(9月19日までは60元だったらしい。)

周荘は、街の中を堀割が巡り、堀端は枝垂れ柳の

並木となっており、堀に古い石橋が架かる美しい景観は、正直はっと息を呑むほどでした。堀には手漕ぎの舟が行き交い、女船頭が昔から伝わる舟歌らしき歌を甲高い声で歌っています。ヴェネツィアと同様に徒歩か舟でまわるしかない本当の水の都ですが、歩行者路はほとんど自然石で舗装されており、欄干も同じような石材で造られていて、ちょうど腰が掛けられるくらいの高さです。橋は舟が通れるよう太鼓橋となっており、橋の中央が最も高くなっていて眺望がよいことから、多くの観光客が足を止める絶好の記念撮影ポイントとなっています。ヴェネツィアでは、橋は住民達が立ち止まって世間話をする場所となっていたようですが、橋の上は人々が溜まる場所となっているというのが共通していると感じました。

堀と柳が織り成す風景は、昔の新潟市を思い起こさせ、新潟市も堀を残していたら、同じような光景が見られていたかも知れないなと思いました。家々は、明、清時代に建てられた歴史ある白壁と透かし窓が特徴となっています。特に美しいというわけではないのですが、統一感によって街並み全体が魅力的なものとなっているようです。

また、この街が世界的に有名になったのは、1984年にニューヨーク留学中の上海出身の画家陳逸飛氏が、周荘に架かる石橋の中でも最も有名な世徳橋と永安橋の絵を描き、「メモリー・オブ・ホームタウン」と名付け、この絵が1985年に、国連が毎年発行する記念切手の初日カバーに選ばれたことによります。芸術の世界で注目を浴び、国連という地球規模で活動する組織に取り上げられたことが、周荘に中国第一水郷の称号を与えることになったというわけですね。

すっかり観光地化した周荘に本来の魅力は薄れたとする見方もありますが、国際都市-上海から地理的に近いこともあって、観光客の人気は衰えないようです。私自身としては、中国に周荘に勝とも劣らない美しい水郷の街を発掘できるような旅をいつしかしてみたいと思います。

栗原 道平





## report 13 '04 水辺シンポジウム「水辺の再生によるまちづくり」

平成16年12月4日(日)に、毎年恒例の水辺シンポジウムが県立生涯学習推進センターで行われた。今回の水辺シンポは新潟県教育委員会との共催で「にいがた連携公開講座」の一環として開催。開会前に水と緑の寄ったかりで好評であった新潟市大形小学校の生徒たちに今年の水辺賞の贈呈があり、森本世話人の伴奏で「川に歌を流そうよ」が100余名の参加者の合唱でシンポが幕開けた。ゲストには、九州大学大学院教授の島谷幸宏教授、新潟市長の篠田昭氏を迎え、新潟のまち中を流れていた他門川や堀を中心テーマに議論された。

シンポは新潟大学大学院生の陣内洋一郎君と佐藤誠君の研究報告で始まった。会員29名参加の視察・研究報告は、ソウル市中心部の道路を壊しその下を流れる清溪川(チョンゲチョン)の復元事業。もう1つの報告は、東京日本橋の高架道路撤去-地下道路構想の研究。上山寛世話人からは他門川再生'90年案を、'04年の時代背景の中で自然再生、堀再生まちづくりにつながる新たな視点での都市再生戦略として再提言された。5月に萬代橋が国の重要文化財指定を受けた機会に萬代橋周辺では景観地区指定へ向けた市民研究が始まっていることもあり、他門川再生研究の意味は大きい。この研究は、内閣府の『自然共生流域圏・都市再生研究イニシアティブ』の一環で3ヵ年続く予定。

島谷教授の特別講演では全国各地域で始まっている水辺の再生事例や考え方、活動、成功への秘訣などが、佐賀県の縫の池復元活動、松岡川自然再生事業、島根県の堀川舟運再生事業、授業での問題解決研究など多くの事例とともに語られた。

パネルディスカッションでは大熊孝代表の進行で、島谷教授、篠田市長、上山氏のほか、信濃川ウォーターシャトル(株)社長の栗原道平氏、堀割再生実行委員会代表の川上伸一氏、通船川・栗ノ木川ルネッサンス代表の星島卓美氏に加え、加治川村からテレビ中継で加治川ネット21代表の若月学氏の8名で行われた。討論では「他門川を中心とした堀の再生」の意義や再生の可能性について議論された。他門川が、中心市街地の真中にあり信濃川とまち中の堀を



結ぶ戦略的な位置にあること、下町までつながるなどの立地条件に加え自然流下で通水できる可能性があること、水上バスと合わせた新潟の観光の定番として位置づけできること、水都再生の顔なることなど川の復活の意義が挙げられた。他門川復活の実現性については、柳都大橋幹線の整備による交通事情の変化や新潟市の合併や政令指定都市になることなどをきっかけに、水辺を中心としたまちづくりを市民債など新たな投資も含めた住民や企業の参加型で行うことができれば十分可能ではないかということが議論された。今後、清溪川と姉妹河川にしてソウルとの国際交流のきっかけになり、新潟市の中心となるような他門川の再生を目指しより具体的な計画研究をおこなっていく必要があると結び、水辺シンポは閉幕した。

この他門川再生研究は、大熊代表や上山、石月升世話人、若手の研究者、技術者、学生、市民運動家との協働・連携での調査・研究をおこなうため、今後まちづくり戦略の都市再生研究会を呼びかける予定。また、官民連携での研究にするため公開フォーラムを開く。05年の水辺シンポでは、新町川を守会(<http://www2.tcn.ne.jp/~nposhinmachigawa/>) 会長中村英雄氏やソウル市のチョンゲチョンの担当者などを招くことも検討している。より広い市民のご意見を伺いながら研究を進めたいと思っているので会員のご協力をお願いしたい。

文責 寺村淳・相楽治

## ■事務局移転のお知らせ

10月より水辺の会の事務局が、新潟市河渡のサザンウィンド内から同市みずき野にできた大熊代表の大熊研究室へ移転しました。

移転先の大熊研究室は高床式の木造家屋で、床下倉庫やまきストーブなど魅力がいっぱいです。

また、水辺の会の看板も設置していただきました。この「NPO 法人新潟水辺の会」と書かれた看板は大熊研究室をつくっていただいた旗野さんから寄付していただきました。

おこしになられるときの目印は、この看板が屋根の上にある展望台を目印にしてください。



入り口の看板



開所式の様子

新しい住所は以下の通りになります。

〒950-2264

新潟市みずき野 4-7-15

大熊 孝方

NPO 法人 新潟水辺の会

電話 :025-264-3191

FAX:025-264-3260

(恐れ入りますが郵送先などの変更をお願いします。)

## 入 会 案 内

この会は、遊び半分・真面目半分で活動しています。

ウォッチングには、家族ぐるみで子供達も一緒に参加したりしています。

自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。

今までとは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までとは違うものに見えてきます。新しい発見があります。自分の世界もまた少し広がってきます。

この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。

■設立年:1987年10月15日 ■目的:水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。 ■代表者:代表 大熊 孝(新潟大学工学部教授) ■会員数:個人220名・法人12団体(2005年1月現在) ■活動:水辺シンポジウムの開催/水辺ウォッチング/会報「新潟の水辺だより」の発行/水辺環境整備に関する学習会/長野県富山県の水辺グループとの交流会/通船川、佐瀨の調査・研究 etc. ■年会費:個人会員一口1,000円を2口以上、賛助会員(法人など)一口5,000円を2口以上

### 入会申込書

年 月

フリガナ氏名		男・女
		歳
特技や水辺への想い		メールアドレス
住所	〒 ( ) -	
職業		
勤務先	〒 ( ) -	

注)紙面の都合上、縮小しています。  
250%程度拡大コピーをしてご使用下さい。

### ●事務局からのお願い

インターネットメールで随時会員の皆さんに情報をお届けしています。メールアドレスを新しく持った方、アドレスを変更された方は事務局まで御一報ください。

●発行:特定非営利活動法人 新潟水辺の会

●事務局:〒950-2264新潟市みずき野4-7-15

大熊 孝方

Phone 025-264-3191

F a x 025-264-3260

e-mail: info@niigata-mizubenokai.or.jp

ホームページ

http://www.niigata-mizubenokai.or.jp